

## タイ北部中期中新世最末期の Chiang Muan 層から産出したテトラコノドン亜科 (哺乳綱、偶蹄目、イノシシ科) の同定 New Tetraconodontinae (Suidae) from the latest Middle Miocene in the Chiang Muan Formation, the northern Thailand

小澤 祐介<sup>1\*</sup>, 仲谷 英夫<sup>1</sup>

OZAWA, Yusuke<sup>1\*</sup>, NAKAYA, Hideo<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 鹿児島大学大学院理工学研究科

<sup>1</sup> Grad. Sch. of Sc. and E, Kagoshima Univ.

チェンムアン炭鉱は東南アジアにおいて最古の大型類人猿が発見されたタイにおける最も有名な化石産地の一つである (Kunimatsu 2002; Chaimanee et al. 2003; Kunimatsu et al. 2004)。このチェンムアン炭鉱は Chiang Muan 層からなる。Chiang Muan 層では火山灰や火山岩が欠如しているため Nagaoka et al (2002) と Sukanuma et al. (2006) による古地磁気解析と Nakaya et al (2002) と Pickford et al. (2004) による生層序比較がなされるまで年代が明確でなかった。これらの研究の多くはタイ・日本古生物調査隊 (TJPET) の功績を基になされており、Chiang Muan 層は中期中新世後期から後期中新世前期 (9.8-13Ma) に相当することが判明した。Chiang Muan 層は下部から上部にかけて五つの部層に分けられている (Fukuchi et al., 2007)。その内、Sa Tai Lignite 部層と Kon Lignite 部層は多くの脊椎動物化石を含む部層であり、今日までに霊長類、長鼻類、サイ類、イノシシ類、マメジカ類、シカ類、ウシ類、鳥類、爬虫類、硬骨魚類が発見されている (Nakaya et al., 2002)。Pickford et al. (2004) の報告では現在までにイノシシ上科に属する4種が Chiang Muan 層から発見されている。その内二つは *Parachleuastochoerus sinensis* と *Conohyus sindiensis* (テトラコノドン亜科)、もう一つはイノシシ亜科に分類される *Hippopotamodon cf. hyotherioides*、そして最後の一つはペッカーリー科に属する *Pecarichoerus sminthos* である。

TJPET はチェンムアン炭鉱の Chiang Muan 層を集中的に地質学・古生物学的な調査を行い、いくつかのイノシシ化石を発掘しており、2005年には本標本であるイノシシ化石 (CMu 050625-01) が発見された (Fukuchi et al., 2006)。この化石は一個体からなるが、完全な骨格ではなく、頭蓋の一部と遊離した上顎歯 (切歯・前臼歯・大臼歯)、下顎第二前臼歯から第三大臼歯を含んだ下顎骨、上腕骨、橈骨、中手骨、手根骨、大腿骨、膝蓋骨、脛骨、腓骨、中足骨、足根骨、指骨、椎骨の破片、肋骨と思われる長骨が保存されている。本標本は下顎歯と下顎骨にテトラコノドン亜科に該当する形質的特徴を示している。また、Chiang Muan 層から発見された別個体の下顎歯列 (CMu 201) も本標本と同じ形質的特徴を示しており両者は同種であることが推測される。二つの化石が示すそれらの特徴を Pickford (1988) と Made (1999) で示された標徴を基に解析し、それらのイノシシ化石が *Conohyus sindiensis* に近いことを明らかにした。しかし、それら二つのイノシシ化石の下顎第四前臼歯は *C. sindiensis* が示す特徴と異なる点があり、ここでは *Conohyus cf. sindiensis* と同定した。

キーワード: 中新世, 哺乳綱, イノシシ科, テトラコノドン亜科, タイ, 化石

Keywords: Miocene, Mammalia, Suidae, Tetraconodontinae, Thailand, Fossil